

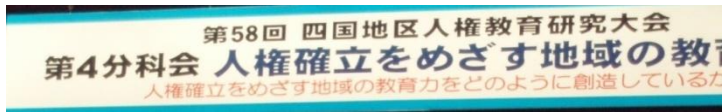
四国地区人権教育研究大会 徳島

第58回の標記の会が6月30日(木)・7月1日(金)の両日、徳島市の「アスティとくしま」ほか各会場で開かれた。

この会は、「四国はひとつ」の合言葉のもと人権問題の解決をめざしてきたが、「差別は今なお根深く存在し、社会的に厳しい立場に立たされている人々に対する人権侵害」が後を絶たない、と大会要項の中にある。

「人権確立をめざす地域の教育力」を問う第4分科会でいくつかの報告があるなか、新居浜南高校の松本秀樹さんが「南沢笑子さんの想いをつなぐ」のテーマで発表し、参加者から多くの関心が寄せられた。

高知県の鏡野中学校の阿部良助さんは、報告のなかで『先生、私らの子どもが差別に負けて死なんような教育をしてよ』という同和地区の保護者の心の叫びを、私たちの心の真ん中に置いている」と語った。また、会場の参加者を交えての話し合いの中で、「私の息子が『おとうよ、相手の女性に言わないくまいかなあ』と問いかけてきた」との発言があった。ここには、まだ、重い現実がある。一日も早い解決に努めたい。



瀬戸会館だより
平成23年8月号
新居浜市瀬戸会館
〒792-0821
新居浜市瀬戸町7-30
E-mail
seto@city.niihama.
ehime.jp
TEL 0897
41-5859
(FAX 兼用)



泉川小学校 「なかま集会」

6月16日、泉川小学校で「なかま集会」が行われました。「一人一人が大切ななかま」のテーマのもと、各学級で「一人ひとりが大切にされる学級を作ろう」との思いを込めて、みんなで考えて作り上げた学級旗。その学級旗の意味するところを一年生から六年生までが次々に発表します。それぞれに工夫を凝らした楽しい発表でした。つづいて校長先生から「とくに、皆さんの聴く態度が素晴らしかった。」とのお話がありました。そして、最後に児童代表から、「この学級旗のもとで「みんなが楽しい学級」づくりに取り組みましょう」との閉会のあいさつがありました。保護者や地域の方もたくさん来られて熱心に参観されていました。「相手の立場や思いに心の目や耳をひらいて聴こうとする姿勢」はこのような行事を通して育まれているのですね。



楽しかった夕涼み会

7月17日(日)は瀬戸児童館の夕涼み会。そここで二世帯、三世帯の輪ができています。運動場の三方をテントが囲み、そこではジュース、わらびもちなどが売られ、リサイクルバザーの前にも人が並ぶ。また、くつつきダーツなどの楽しいゲームコーナーがあり、高校や高専の学生がボランティアでせわしく動く。

これまで好評だったゆかたファッションショーは「2011 SETOコレクション」と名前を変えての登場だったが、どの子もステージに上がると可愛いゆかたで得意のポーズ。カメラがいくつも追いかける。

夕陽が沈むころ、花火が打ち上げられてフィナーレの合図。会場は一斉に「ワー！」の声、空を見上げる。800人を超える人が楽しんだ。

皆様のご来館をお待ちしています。

第4回 であい展

期間 平成23年8月10日(水)~8月16日(火)

時間 8月10日~15日 9:00~17:00

8月16日 9:00~21:00 夏祭りと同時開催

ところ 新居浜市瀬戸会館 新居浜市瀬戸町7-30

TEL 0897-41-5859

人権あらかると

『竹田の子守唄』

臼井敏男（慶應義塾大学非常勤講師）

守りもいやがる ぼんからさきにゃ
雪もちらつくし 子も泣くし

はよも行きたや この在所こえて
向こうに見えるは 親の家
向こうに見えるは 親の家

哀切なメロディーにのせて、フォークグループ「赤い鳥」が1971年に大ヒットさせた『竹田の子守唄』である。グループのリーダーだった後藤悦治朗がこの曲を初めて聞いたのは、その数年前、フォークソングのコンサートだった。『竹田の子守唄』は、子守歌といっても、幼い少女たちが子守奉公や弟妹の世話をさせられた「守り子」の労働歌である。

後藤は歌がヒットしたあと、ルーツを探して歩いた。子守唄に出てくる「在所」は、京都では被差別部落を指すことがある。それがひとつの手掛かりになった。『竹田の子守唄』は京都市の被差別部落で歌い継がれていたことがわかった。それが地元の合唱団で歌われ、フォークソングのコンサートでも歌われるようになったのだ。

後藤は、元歌を歌っていた女性の録音テープを聞いた。テンポが速い。「元歌は仕事をしながら歌っていたので、労働現場のリズムです。ぼくらが歌っているのは、人に聴いてもらうための舞台用のリズムです。ゆったりしている」と後藤。レコードを出した翌年の72年、後藤は京都で「赤い鳥」のコンサートに、元唄を歌っていた女性を招いた。女性は「部落の恥をさらすことになるので、もう歌わないでほしい」と言った。

後藤は当時のことをふり返る。「女性の名前を出して、『竹田の子守唄』という素晴らしい歌を伝承させた人です、と全国の人たちに伝えたいと思っていました。ところが、歌われることさえ嫌だ、と言われた。女性の気持ちはよくわかる。しかし、この素晴らしい歌はずっと歌い続けたい。そのことを息子さんらに話した。すると、彼らは納得してくれたんです。後藤がそこまで言うのだったら、自分たちも応援するから、歌い続けてくれ、と」

しかし、テレビやラジオはそうではなかった。『竹田の子守唄』が被差別部落に伝わる歌であることが知られるにつれ、電波で流れることがめっきり減った。

臼井敏男『部落差別をこえて』（朝日新書）より。標題は当方でつけさせていただきます。また、紙面の都合で一部割愛させていただきました。

8月の主な行事予定

8月10・24日(水) — 移動図書館(14:00~14:40)

8月11日(木) — **人権のつどい日**

「私と人権」講師 越智 直志さん

皆さんおこしく下さい。

8月30日(火) — 独居老人宅訪問(午前中)

毎週木曜日 — であえおはなし会(15:50~16:10)

「人権のつどい日」にひろう

7月11日(月)の研修では、『クリームパン』という人権啓発DVDの視聴から始まった。アパートでひとり暮らしの青年は失業中で、ふと死を考えることもある。隣室には同居の男から暴力を受けている女性と男の子が住む。それにパン屋を営む女性店主がからむストーリー。

「自殺」と死に至る可能性をもつ「虐待」の二つのキーワードで展開する話が「いのちの大切さ」につながり、「あなたが隣にいてくれてよかった」という劇中のせりふが生きてくる。

人と人がふれあい、心を通わせることで救える「いのち」がある。人にかかわってもらっていない状況の人たちに、目を向ける必要はないのだろうか。今こそ、おせっかいおじさん、おせっかいおばさんの出番なのかもしれない。無関心ほど恐ろしいものはないのだから。



大島 イワシ加工場を訪ねて

7月13日(水) 久しぶりの大島。船を降り、路であう誰とでも会釈を交わす温かさに再会、なつかしい。すぐわきに横付けされた漁船から、魚はパイプでイワシ加工場に吸い上げられて大きな装置の中へ。そこで洗浄選別されたあと、広い板状の網にイワシが適量盛られ、それを水面に浮かせながら女子作業員の手で均一にイワシが網の上に広げられる。

この網をベルトコンベアーに乗せると、自動的に流れて行って14段くらいまで網が重なっていく。見てみると面白い。14段のかたまりが2つできると動き出し、煮えたぎる熱湯に入りおよそ4分。蒸気と共に釜から出てきたイワシは、人の手で乾燥機がうなりをあげる部屋に運ばれる。魚をゆがく釜は手前に3台、向こうに2台がフル稼働。

中山政照さんの話では「ここでの仕事は6月のあたまから8月いっぱい。去年は9月も操業したけど、今年は遅れぎみで、イワシも少し小さい感じ。」とのこと。朝の5時半ぐらいからの作業は、10時を過ぎた今も流れるように続く。鮮度が勝負なのだろう。

乾燥させたイワシはベルトに乗せられ品質点検。ベルトの両側から鋭い視線を注ぐ働き手は、若手のほかに「元若者」の姿も多く、特に中山市郎さんの82歳とは思えないお元気な動きには驚く。省エネで照明はひかえめだが、手順はそれぞれが飲み込んでいて、なにしろ、明るい雰囲気うれしくなる。